

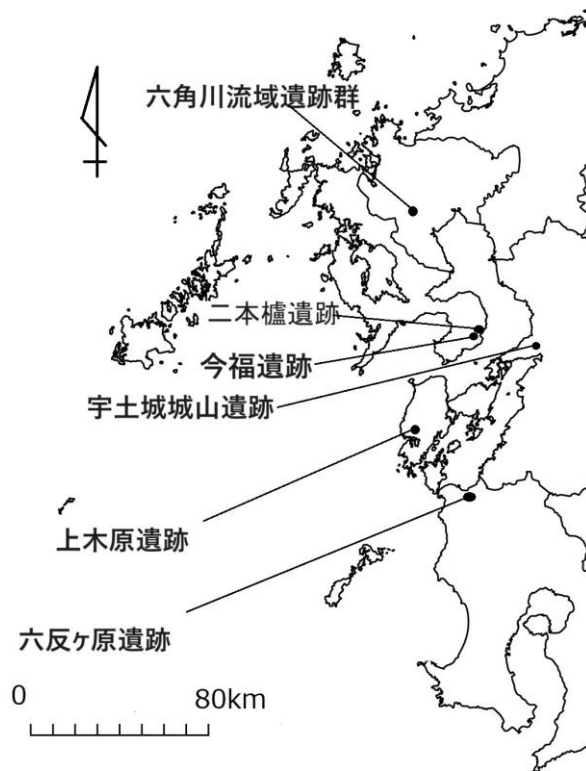
だんよしかつ ろくたんがまる

檀佳克「六反ヶ丸遺跡出土土器に関する覚書

—弥生～古墳時代移行期の鹿児島県北東部と島原半島の交流— を読んで

檀氏のこの論攷が長崎県本土部の当該期の土器研究に大きな影響を及ぼすことは確かである。なぜなら同氏によって「島原半島系土器」の台付甕が、薩摩半島北部（北薩地方）にも分布することが実証されたからである。

ここで簡潔に「島原半島系土器」様式を紹介すると、様式名の提唱者は石橋新次氏で、宮崎貴夫氏などが研究を牽引してきた。同様式は弥生時代後期後半に島原半島南部で成立し、標式遺跡は南島原市今福遺跡である。代表的な形式として脚台付の甕形土器があり、口縁部が内湾することが同時期の他地域の甕形土器とは大きく異なる。壺形土器や高坏形土器は口縁部が直立する型式が多く、肥前型器台と呼ばれる装飾器台が土器様式の中にも含まれることも特徴的である。盛期は弥生時代後期から古墳時代初頭であり、古墳時代前期には姿を消す。その分布は本県本土部のソノキ、タカクをはじめ佐賀県武雄市六角川流域、天草下島、熊本県宇土半島、八代海（不知火海）沿岸、そして北薩地方である（第1図）。



第1図 島原半島系土器出土遺跡（古門 2024）

檀氏の指摘で重要なのは島原半島系土器の分布もさることながら、六反ヶ丸遺跡出土土器の検討から、当該期の有明海沿岸の交流ルートとして、熊本県から有明海・八代海東岸を通るルートよりも、島原半島から天草・長島地域を介して出水平野方面に南下するルートの方が主体的であった姿が見えてくるとしている点である。ただし氏も島原半島系土器を出土する遺跡が少ない現状での考察であることを断っている。

筆者（古門）は当時の交流ルートの反映であることもさることながら、島原半島南部の海民の活動範囲の反映ととらえており、今後は彼らの出自、活動範囲、歴史的役割などの解明が必要と考えている。

さらに氏の指摘で重要なことは、六反ヶ丸遺跡出土の「島原半島系土器」の台付甕形土器が氏の胎土観察によって、当地（出水平野）で製作された可能性が高い点である。すなわち島原半島南部で製作されて持ち込まれた土器はわずかで、基本的に在地で製作されていた事実は重要であると考えられる。

以上の筆者の論評は檀氏の論攷の結論のみを対象として行ったものであり、論攷の半分以上を占める当該土器の器形や製作技法の氏の精緻な分析検討には触れていない。土器研究の上級者である氏の観察には参考になる点が多く、ぜひ原典にあたっていたきたい。（文責：古門）

【出典】

龍田考古会編 2025 『先史学・考古学論究 9』 小畑弘己先生退任記念・考古学研究室創設 50 周年記念

【引用・参考文献】

古門雅高 2024 「【研究ノート】長崎県南島原市二本櫛遺跡出土の「島原半島系土器」
『老朗漫筆』

<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/shimabara.pdf>